

ぶろーくんジュリエット

ぶろーくん  
ジュリエット

〜 Juliet says 〜

脚本

蔵重  
智

【登場人物】

ジュリエットと名乗る者 (以下 ●と記載) 年齢不詳

舞台中央にバルコニーの手すりを模した舞台装置がある。

それは、法廷の証言台のようにも見える。

●がそこに登場し、しばらくうつむいて立っている。

場内の空気が変わると、観客を一度静かに眺める。

そして、上を見上げて宣誓をする。

● 宣誓

良心に従って真実を述べ、何事も隠さず、

偽りを述べないことを誓います。

ジュリエット・キャピュレット。

大きく息を吸い、観客に向かって話しかける。

● シェークスピアが描いた「ロミオとジュリエット」で

私のことを、知っている人もいます。

でも、はじめにお断りをさせていただきます。

あれは「本当の私」を、描いていません。

劇作家が、私について、面白おかしく、

私に断りなく勝手に描いたものです。

もちろん、すべてが嘘だというわけではありませんが、

すべてが真実だというわけでもありません。

だから、私は今、ここで、

私、ジュリエット本人だからこそ語ることができる

「本当のジュリエット」を

みなさんにお伝えしたいと思います

● 今から話すことは、信じてもらえないかもしれませんが、

当たり前ですよ。

今、会ったばかりなのに、いきなり信じろというのも、

私が見なさんのことをよく知らないのと同じように、

みなさんも私のことをよく知らないのですから。中には私が「ジュリエットの名を語っている偽物」だと疑っている人がいるかもしれません。

でも、私が本物か偽物かが問題じゃないんです。私を偽物だと疑うのなら、それでもいいです。大事なものは、

「ロミオとジュリエット」の悲劇のヒロイン「ジュリエット」。それがジュリエットという人間のすべてだと判断されてしまうのが問題なんです。

「ジュリエットはもしかしたら

こういう人間だったのかも」と

少しでも気に留めてくれるだけでいいんです。

非難でもいい、共感でもいい。

そのために、私は、今、この場所にいるのです。

大きく息を吸う。

そう、もう一度言います。

私の名前は ジュリエット・キャピュレット。

これから話すのは、13歳の私の身の上起こったたった四日間の出来事。

この四日間は私の人生の中で、本当に大事な四日間。

あの時は、頭も心も未熟で、

自分の想いをうまく伝えることもできなかった。

ようやく、できるようになった今だからこそ、

私「ジュリエット」の話に

みなさんの耳を傾けてくれたら、それだけでうれしいです。

今一度、観客を見回す。

●  
ありがとう。でも、そんなに深刻な顔はしないで。ちよっと私の話を聞いてもらいたいただけだから、肩の力を抜いて、気楽に聞いて。リラックス、リラックス。私も気楽に話すから、ね。

大きく息を吸う

● まずは私について。

● 私の名まえは、ジュリエット・キャピュレット。  
私の出身地は、イタリアのヴェローナ。知ってる？  
イタリアの長靴の形でいうと、このあたり。

● ふくらはぎ（履き口の部分）を指す。

● ここがヴェネチア、ここがミラノだとすると、  
ちょうどその中間あたりね。

● で、このヴェローナで有名な「キャピュレット家」の一人娘。  
それが私！ 世間知らずで、いわゆる「箱入り娘」。

● ここで「キャピュレット家の人々」紹介！！  
お金持ちで権力者のパパ、美人で教養のあるママ、  
私とは従兄弟の関係だけど  
お兄さんみたいなテイボルト兄さん。  
そして、たくさんの召使いたち。何不自由のない生活。  
それが、世間に知られている、この家の事。

● でも、知られていないこともある。  
パパは女と金にだらしなく、陰では悪い事ばかりしている。  
ママはテイボルト兄さんにベタベタご執心。  
テイボルト兄さんもママにベタベタなついている。  
召使たちも、それを知っていて陰口をたたいてばかり。  
みんな笑顔で私に接するけど、その裏は汚いことばかり。  
オトナはみんな汚い！！

● あの頃、私がおうちよつと視野が広がったなら、  
それでも、うまく立ち回れていたのかもしれない。  
でも、そんな事すらも考えつかなかった13歳。  
みんな、13歳の頃ってそんなものでしょ？

●  
そして、はじまりは本当に突然だった。

朝、パパとママにおはようの挨拶をしたら  
パパがこういうの。

「ジュリエット、もうすぐお前も14歳だな。」

14歳と言えば、もう大人。

だからお前の結婚相手を決めておいた」

●  
え〜っ！ なに、それって。

私、聞いてないから。結婚？ 相手は誰？ パリス？

あつ、大公のエスカラスさんところの、息子さん。

いやいや、プロポーズどころか、付き合ってもいないから。

って、いうか、私、結婚したいって言ってないから。

確かに前にママが

「結婚するなら、お金持ちと貧乏人、どっち？」

って、聞いてきたから

「そりゃ、お金持ちの方がいい」って答えたら、ママが

「大公さんところもお金持ちよね。そういうこと？」

って、きたから

「そりゃ悪くはないわ」って答えただけ。

それ？ それで決定。ありえない。

だいたい、パリスとは何もないから。

嫌ってはいないけど、好きでもないから。

いわゆる「いい人」。でも「残念な人」。

例えば、前にプリンをお土産に持ってきてくれたんだけど

私が「このプリン、美味しい！」って言ったら

それから毎回必ずそのプリンを持って来る。

いや、たしかにプリンは好きだけど、

「プリンをくれる人」を好きになるわけじゃない

ほんと、残念。

●  
結婚って、人生において、重大なイベントなのに、

なんで当事者の私抜きで、勝手に決まっているの。

パリスもパリスよ。

プロポーズもしないで、親の決めた縁談に乗っかるの？

父親の言いなり？

自分の想いを私にまず伝えるのが普通じゃない。

その自主性の無さはなに？

「自分で何も決められない」なんて、ホント嫌！

これだけでも唐突すぎるけど、パパは

「今夜、我家のパーティーにて、

ジュリエットは社交界デビューだ」って。

いや、なんですか、それ？

しかも、パリスがそのパーティーにやって来るって。

えっ、いきなり婚約発表記者会見ですか？

ちよつと、ほんと聞いていないですけど。

でもNoと言ったところで、私の言う事なんて

聞く耳持つちやいない。

私の社交界デビューにパパもママも舞い上がっていて、

結局、パーティーに無理やり出ることになった。

私にとってこのパーティーはとっても居心地悪かった。

パーティーの出席者たちは、誰も私をちゃんと見てはいない。

パパやママの事ばかり気にしている。

私が目の前にいるというのに。

私をちゃんと見てくれるのは「乳母」のピーターだけ。

私が小さい頃からずっと面倒をみてくれた。

ちよつとお馬鹿なピーター。でも、私は好き。

私が話しているときは、黙って私の眼だけを見てくれる。

私はピーターの瞳の中にいる私の姿を見て、安心する。

私はここにちゃんと居るんだなあ　って。

でも、ピーターもいつまでも私のそばにいられるわけがない。

神様、お願いです。

いつでも私の事を見てくれる人が私の前に現れますように。

そしたら、キター！　ほんとにキター！

そう、運命の人との出会い！

ふと外に目をやったら、その先にいた。

名前も知らない。顔も知らない。

おそらく初めて出会った人。

でもその時、私はこの人が運命の人だと確信した。

彼も私を見つめていた。私の胸も高鳴った。

今までも多くの殿方と目があつたことはあつた。

でも、私と目が合うとみんな、パパに視線を移すの。

「娘に色目を使うとは何事だ！」とパパが激怒して、

この街にはいられなくなった人は数知れず。

次の日、お池でチャプチャプ浮かんでいた人もいたとか。

でも、彼は違っていた。

私と目があつても、目をそらさなかつた。

それどころか、私の目を見たまま、

ゆっくりと私の方に近づいてきた。

私も、彼から目が離せなかつた。

まるで磁石が引き合うかのごとく、

彼は私の目の前に来て、そして止まつた。

彼はまつすぐ私を見つめていた。

彼の瞳の中には、私が映っていた。

そう、彼の中に私はいた。

そして、彼の瞳の中にいる私の瞳には、彼が映っていた。

そう、私の中に彼がいた。

そんな、合わせ鏡の世界で、無限に続く私と彼の姿。

一瞬の出来事なのに、それは永遠の時間に思えた。

### 自分の胸（心臓）を指す。

今、私のココロは、彼のココロとつながっている。

それをぶち壊したのは、ティボルト兄さん。

いきなり私たちの間に割って入ってきた。

まあ。吠える、吠える。

昔は、憧れていたティボルト兄さんだけど、

いまやママの飼い犬、番犬。

しつぽ振るカッコ悪さしかない。

でも、彼はひるむことなく、吠える犬をなだめた。

しかも、もめごとを避けるべく、彼は紳士的に去っていった。

私と合わせた目は離さないまま、

背中は見せず、パーティーの人の波の中に消えていった。

きつとまたすぐに会える。なんだかそんな気がした。

ピーターに、彼のこと知っている？と聞いてみたら、  
なんと驚き。

そう、彼こそが、みなさんご存知

「ロミオ・モンタギュー」17歳。

パパと敵対するモンタギュー家の一人息子。

ロミオ。初めて口にする言葉だけど

ロミオ、口にするたびに私の胸は高鳴った。

ロミオ、会いたい。ロミオ、また会ってくれますか？

ロミオ、また静かに目を合わせたい。

ロミオ、ロミオ、ロミオ！

私の頭の中はもうロミオでいっぱい、

今朝の嫌な出来事なんかどこにもなかった。

そして、その日はそれで終わりじゃなかった。

パーティーも終わり、みんなが寝静まった夜。

私は興奮冷めやらずで、部屋でお月さまを眺めていた。

すると、庭から私を呼ぶ声が。

バルコニーに出てみると

ロミオ、キター！

身の危険を顧みず、彼は私の家に忍び込んできた。

いや、冷静に考えると不法侵入だけだね。

でも、二人の愛は法律もモラルも超えるの。

禁断の出会いの中、私たちは愛を語らった。

そう、愛を言葉で形作るのはとても難しかった。

でも、お互いがその困難を共有し、

それでも二人の愛の形をつくろうと慈しみあった。

どんな会話をしたのだった？

その内容は秘密ね。



知りたい人は「ロミオとジュリエット」読んだら？  
全部載っているから。

とにかく、禁断の二人が結ばれるには  
大人たちの言う事に従っちゃダメ。  
だから、明日、二人だけで結婚式を挙げる約束をした。  
神様を前にして二人が一緒になることを誓い合うんだから。  
既成事実。やったもの勝ちよ。  
大人たちでも、この事実は変えられない。

ロミオとのお別れの口づけで、その夜は終わった。  
私を無垢な少女と呼ばないで。  
ロミオがいれば、なにも怖くない。  
眠れない夜となり、また朝となった。  
これが一日目である。  
純粋な少女、ジュリエットの一日。

そして、二日目のはじまり。  
睡眠不足の目覚めだけど、  
こんなにエネルギーに満ち溢れる朝はいままでになかった。  
そう、今日は私とロミオの結婚式！  
夢にまで見た、理想の人とのウェディング。  
きゃー、Yes` Yes` Yes` --  
これから目指すは当然、教会。  
パパとママにはお祈りだって嘘をついて、外出。  
罪悪感なんてあるわけない。  
パパとママの方が、よっぽどひどい嘘をついてきたじゃない。  
神様、二人に罰を与えたまえ。

修道士のロレンスさん、ほんまいい人。  
当日飛び込みなのに、快く結婚式を引き受けてくれるなんて。  
そして、私とロミオは神様の御前で結ばれた。  
神様、二人に祝福を与えたまえ。

夢見ていた結婚式とは違うけど、  
心から本当に愛するあなたとなら、

●  
どんなことになっても、一緒に暮らせる。  
他人からもらったプリンよりも、  
好きな人と一緒にそろえた材料で作るプリンの方が  
美味しいに決まっているじゃない。

●  
愛しています。愛しています。  
あなたのそばにいつまでもいます。  
だから、ロミオ、私を愛して。  
いつまでも、私のそばにいて。

### 大きく息を吸う

●  
と、ここまでが、私が幸せだった時のお話。  
ここから先は、もう転がり落ちるしかない。  
「結婚式あげたその日に新郎が殺人犯になる」ってある？  
何を言っているか、わからない？  
私にもわからなかったわよ、その時は。

●  
うちのキャピュレット家の若い衆と、  
ロミオのところのモンタギュー家の若い衆が  
いつものように小競り合い。  
ロミオの友人マーキューシオは、  
よりによってティボルト兄さんをからかった。  
ティボルト兄さん、マーキューシオをグサツ！

●  
ロミオはマーキューシオに結婚の報告をしようとして、  
運悪く、その現場に。  
友達を殺されて、ロミオは怒り、ティボルト兄さんをグサツ！  
あつという間に死体が二つ。  
親友の敵討ちとはいえ、ロミオは見事な殺人犯。  
大公さんがやってきて、ロミオはこの街から追放。

●  
まったく、なんて日。  
この知らせを聞いたとき、もうパニック。  
どうすればいいの？ 混乱するしかなかった。

● この事件のせいで、外出は親から固く禁止された。当然、親にロミオと結婚したなんて言えるわけがない。パパは家のメンツが潰されたと、もうカンカン。

● ロミオを見つけたら、リンチは確実。お池にチャプチャプ浮かぶどころか、沈められてしまう。ママはティボルト兄さんが殺されて、もう半狂乱。

● この時、私はとんでもなく無力だって思い知った。結婚して、これから自分の手で自分の思い通りにこの世界で生きていけると思ったのに、いままでと変わらず、親に縛られたまま。

● 部屋に戻り、ベッドの中で泣いた。もう泣くだけ泣いた。泣いた。泣いた。泣いた。

● もうどれくらい泣いたのかわからない。気が付いたら、夜中になっていた。

● 昨日の月明かりは、とてもやさしく感じたのに。今夜は、あまりに冷たく残酷に感じた。

● すると、バルコニーに人影が。

● 目を凝らして見てみると

● ロミオ、キター！

● 身の危険を顧みず、彼は私の家に忍び込んできた。いや、冷静に考えると逃走中、危険人物だけだね。でも、二人の愛は法律もモラルも超えるの。

● 禁断の逢引の中、私たちは愛を確かめあった。

● そう、愛を身体で形作るのはとても難しかった。

● でも、お互いがその困難を共有し、

● それでも二人の愛の形をつくろうと

● お互いを慈しみあった。

● そこで気が付いた。

● 彼は私を求めているんじゃない。

● 私の抱擁を求め、そこから自分のやすらぎを求めている。

● ロミオは私に救いを求めに来たのだ。

● 本当は私がロミオに救ってもらいたいくらいだけど

そんなことに気づかずに、彼は私を求めた。  
だから、私は彼を受け入れた。  
私を受け入れてもらうより先に、私は彼を受け入れた。

自分の下腹（子宮）を指す。

● 今、私は、彼とつながっている。

● どんなxxをしたのかった？  
その中身は秘密ね。

● 知りたい人は「ロミオとジュリエット」読んだら？  
載っているわけではないけど。

● とにかく、禁断の二人が結ばれるには  
大人たちの言う事に従っちゃダメ。  
それだけは真実。やったもの勝ちよ。

● この真実は変えられない。  
ロミオとのおやすみの口づけで、その夜は終わった。  
私を淫らと呼ばないで。  
私はあなたの哀しみを眠らせたいだけ。  
眠れない夜となり、また朝となった。  
これが二日目である。

身も心も一人の男に捧げたオンナ、ジュリエットの一日。

大きく息を吸う

● そして、三日目のはじまり。  
睡眠不足の目覚め、最悪。

● こんなにテンションが落ち込んだ朝はいままでになかった。  
昨夜ベッドを共にした人は、もうここにはいない。  
オー、No、No、No！

● ここにいてもいつかは見つかる。  
朝早く人目が無いうちにロミオは逃亡。  
私も一緒に逃亡したいけど、私がいなくなったら、  
パパは間違いなく追っ手を差し向ける。  
そうになったら、二人は必ず捕まってしまう。

執念深い、おそろしいパパ。

これから目指すは当然、教会。  
パパとママにお祈りだって嘘をついて、外出。  
罪悪感だらけ。いや、私もロミオと同じく罪人となる。  
彼一人に背負わせるわけにはいかない。

修道士のロレンスさん、ほんまいい人。  
当日飛び込みの人生悩み相談なのに、快く聞いてくれた。  
そして、おどろくべき解決方法を、  
斜め上行く三段論法で教えてくれた。  
ステップ1「ロミオと私はこの街では暮らせない。」  
当然よね。

ステップ2「だったら、二人は街の外で暮らすしかない。」  
でも、そうなるとパパは力づくでも、  
私を連れ戻そうとする。  
なら、どうやってパパをあきらめさせるか？  
そう、ステップ3

「私がパパの前で死んでしまえばいい。」  
だまって消えても、あきらめたりしないから。  
目の前で死んだらいい。そう、私の死体を見せればいい。

そうか。 って、死ぬの？ 私、死ぬの？  
もちろん、本当に死ぬわけじゃない。

ロレンスさん、どこから手に入れたのか、  
「24時間仮死状態になる薬」！

これを家で飲んで、私は死んだふりをする。  
そして、私の死体は墓地に移され、  
埋葬される前にキャピュレット家の墓所に安置される。  
深夜になって、そこにロミオが迎えに来て、  
私たちは遠い国に逃れる。

13歳の私には、この手しかないと思ひ込んだ。  
これが私たちの生きる道。これに賭けるしかない。

夢見ていた新婚旅行とは違う逃避行になったけど、  
心から本当に愛するあなたとなら、

どんなことになっても、一緒に生きていける。  
愛しています。愛しています。

● **自分の腹（内臓）を指す。**

● 今、私のココにあるすべては、彼とひとつにつながっている。  
彼の痛みは、私の痛み。

● だから、ロミオ、命を賭けてまで私に愛を示さなくてもいい。  
いつも、私のそばにいらなくてもいい。  
あなたが無事であれば、私は幸せ。  
あなたがこの世界にいるだけで、私は幸せだから。

● **大きく息を吸う**

● と、ここまでが、私が仮死状態になる前のお話。  
ここから先に、まさかあんなことになるなんて。  
二人の幸せのための逃亡劇のはずが、  
あんな無残な結果になってしまうなんて。  
何を言っているか、わからない？  
私にもわからなかったわよ、その時は。  
だって、私も仮死状態だったから。  
知りたい人は「ロミオとジュリエット」読んだら  
私もあとで読んで、それ知ったから。

● とにかく、禁断の二人が結ばれるには  
大人たちの言う事に従っちゃダメ。  
それだけは確か。やったもの勝ちよ。  
この気持ちは変えられない。

● でも、私のココロは脆くて壊れそうなプリンのように。  
スプーンの上でふるふる震えている。  
この口におさめるまでは、慎重に、落ち着いて。  
幸せを味わうのは、その後で。

● ロミオが無事でいますように、

そして、ロミオと再び出会えますように。  
薬の瓶に口を付けて、その夜は終わった。  
私を母性あふれるオンナと呼ばないで。  
ロミオが生き延びてくれればそれで幸せ。  
死のような眠りについた夜となり、また朝となった。  
これが三日日目である。  
母性に目覚めたオンナ、ジュリエットの一日。

### 大きく息を吸う

●  
そして、四日目ののはじまり。  
生まれ変わったかのような目覚め。  
まあ、当たり前前よね、一度死んだようなものだから。  
目が覚めたけど、ここはどこ？  
そうか、思い出した。  
ここに来たことがある。おじいちゃんのお葬式。  
私、墓所に運ばれたんだ。  
ということ、あの薬がうまく効いたのね。  
ここまでロレンスさんの計画通り。  
あとはロミオが迎えに来てくれるだけ。  
ロミオ！ どこにいるの、ロミオ！

### 上手に目をやる

●  
オー、マイ、ガッ、ガッ、ガッ！  
これは、ティボルト兄さん？ なんて？  
そうか、従兄弟なのだから、同じ一族だし、  
ここに遺体があるのは当たり前。  
しかも、昨日死んだばかり。  
落ち着いて、落ち着くのを、ジュリエット。

### 反対側に目をやる

●  
オー、マイ、ガッ、ガッ、ガッ！  
なんでここにも、死体？  
パリス？ なんて？ なんてここで死んでいるの？

え、なに、なに？ どういうこと？  
落ち着いて、落ち着くのよ、ジュリエット。

正面に目をやる

● オーイー、マイ、ガッイー！  
なんでここにも、死体・・・じゃない。  
動いている。誰？ 誰なの？  
うめき声は聞こえるけど、顔がよく見えない。  
ロミオ？ ロミオなの？  
早く私をここから連れ去って。  
どうしたの？ なんでそんなに苦しそうなの？

ロミオを抱きしめる

● 息も絶え絶えなロミオ。  
そのぬくもりはいまにも消えそう。  
何かを私に伝えようとしているけど、  
もう言葉出す力もない。  
ただ、私をずっと見つめている。  
でも、彼の瞳に私は映っていない。  
彼の瞳の中は何も映らず、闇があるのみ。  
何もかもが消えてしまっている。  
やがて、彼の魂は闇へと連れ去られてしまった。

静かに周りを見回す

● ロミオの様子からすると、パリスを殺したのはロミオだろう。  
どうしてロミオはパリスを殺したのだろう？  
パリスは何も武器を持っていないけど、花束を持っている。  
パリスは私に花を手向けにきたのだろうか？  
それで、ロミオに墓泥棒と間違えられて・・・

下手に目をやる

● 哀れなパリス。最期まで「いい人」。そして、「残念な人」。



嫌いじゃないけど、好きにもなれない。

上手に目をやる

● 可愛そうなティボルト兄さん。  
キャピュレットの家は、  
私がお嫁に行ったら、後継ぎがないから  
代わりに自分ももらえるって信じていたのかしら？  
でも、パパがそんなこと許すわけがない。

正面に目をやる

● 男の人って、なんて馬鹿らしいことに命をかけるのかしら？  
目の前の命がなによりも愛しく、大切なことを  
見落としているだなんて。

胸に眠るロミオを静かに降ろす

● ロミオ、あなたは何に命を賭けてしまったの？  
毒を飲み干して自ら命を失うほどに、何が大事だったの？  
私とともに死ぬことなの？  
でも、あなたが死んで、私が喜ぶと思っていたの？

● ロミオ。おお、ロミオ。  
私はこれからどうしたらいいの？  
あなたと一緒に生きていく事だけを考えて、  
ここまで来たというのに。  
何も知らない私、頼れるあなたはいない。  
受け入れる準備はできたのに、頼ってくれるあなたはいない。  
あふれんばかりの愛情を注ぎたくともあなたはいない。  
あなたの魂はここから去り、  
私の魂はどこにも行けず、ここにとどまっている。

● 私は何もできず、何も考えられず、  
この暗闇の中でじっとしていた。  
不思議と涙は出なかった。

泣くことすらできず、ただじっとしていた。

小さい頃、プリンを床に落としてしまったことを  
なぜか思い出した。

粉々に散らばったプリン。

一生懸命集めたけど、

バラバラになったものは元には戻らない。

そうか、元には戻らない。

どんなに泣こうが、どんなにわめこうが

誰も元に戻すことはできない。

### 正面に目をやる

生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ。

生きてこの墓所から出て、どうする。

今まで通りの生活に戻るわけでもない。

また、輝かしい未来があるわけでもない。

生きる場所もなく、生きる希望もない。

あるのはこの身体と、傷ついた心。

ロミオがいないこの世界に、なんの価値があるのだろうか。

ならば、ロミオのあとを追って自らの命を絶つ？

でも死んだところで、ロミオと一緒にいられるとは限らない。

このように、多くの亡者たちに囲まれて、

ロミオに逢えない悪夢を見る。

そう、二度と朝が来ない永遠の悪夢。

もう悪夢はたくさん。

私はこの世に生を受けてから、ずっと悪夢を見ていた。

目覚めていたのは、ロミオと一緒にいた時間だけ。

そこには私がいいた。

私は私だった。私以外の何者でもなかった。

私の心は私のものだった。何者にも縛られていなかった。

私の身体は私のものだった。何者にも所有されていなかった。

唯一、ロミオが許され、そして、ロミオもそれを許していた。

●  
ロミオ・・・  
ありがとう。

醜い土塊（つちくれ）だった私に、形を与えてくれて。  
虚ろな人形だった私に、命を与えてくれて。  
無残な死人だった私に、生きる歓びを与えてくれて。

●  
あなたの瞳の中に私がいて、  
その私の瞳の中にあなたがいて、  
合わせ鏡の中で分限に繰り返される私たちの姿の間から、  
悪魔が飛び出すかのように、本当の「私」が現れた。  
ならば、私はこの「私」を守っていく。  
ジュリエット・キャピュレットという女を  
哀れな女のままでは終わらせない。  
それが、あなたと共に在ることだから。  
それが、一緒に生きていくことだから。

●  
ロミオ・・・  
ありがとう。そして、さようなら。

立ち上がり、指を天高く掲げる。

●  
これからどんなことが起きるのかって？  
そんなこと、誰も知らない。  
「ロミオとジュリエット」読んでも無駄。  
あなたたちが想像してみて。  
ひとりの女の、いや、ひとりの人間の人生を。

●  
私がこの世界から目を離してしまっているうちに  
私の周りにいる人たちが傷つけ合い、消えてしまった。  
私が眠ってしまったから。  
私が目をそらしてしまったから。  
私が自分の選択を手放してしまったから。  
私が誰かのせいにしてしまったから。  
だから、私は眠らない。  
私は目をそらさない。  
私の自分の選択を手放さない。

私は誰かのせいにしない。

● 時間は元には戻せない。

明日は少しでも今日よりましになりますように。  
いつかこの悪夢は終わる。いや、終わらせる。

私を崇高な女神と呼ばないで。

愛しき命が繋がっていけばそれで幸せ。

忌まわしき夜となり、また朝となった。

これが四日目である。

人々に祈りを捧げるオンナ、ジュリエットの一日。

● これが13歳の私の身の上で起こったたった四日間の出来事。

この四日間は私の人生の中で本当に大事な四日間。

無垢な少女、淫らな娼婦、寛容な母親、崇高な女神。

この四日間で、私は4つのオンナの姿となった。

こうして「ロミオとジュリエット」の物語が生まれた。

ジュリエット本人にとっては忘れてしまいたい事だけど、

ジュリエットという名の人間が四日間の中に

懸命に生きてきたという事は、誰にも忘れて欲しくはない。

それが、私の願いだから。

● あなたにとつて。今日は

わたし、イカれた、怒れる

「ジュリエット・キャピュレット」と出会った一日目。

これから始まるあなたたちの物語を、いつか私に教えて。

そう、私の瞳を見つめながら。

● 宣誓

良心に従って真実とともにあり、何事も恐れず、

偽りの世界に立ち向かうことを誓います。

ジュリエット・キャピュレット。

観客に一礼をして静かに去る

終わり

原案 ウィリアム・シェイクスピア「ロミオとジュリエット」